

脇田晴子著

『能楽からみた中世』

東京大学出版会 二〇一三・五刊

A5 三二〇頁 五八〇〇円

日本中世の経済史および女性史において、著者が多くの業績を成してきたことは周知のことであるが、同時に、幼いころから能楽に親しみ、幾度かの舞台経験をもつことも著者の一面である。

本書は、そうした著者が、一九九九年以降に発表した能楽に関する論考、および書き下ろしをまとめたものである。構成は、大部の総論を冒頭に置き、第Ⅰ部「神々と地域社会の中世」、第Ⅱ部「表現のなかの女性たち」、第Ⅲ部「芸能の場の成立」となる。

総論「総合芸能としての猿楽能―老若男女貴賤都鄙の芸能」では、在地と都をつなぐ文化の中継者としての役割を果たす猿楽について、在地の勸進猿楽、都鄙を往来する猿楽、作品の題材としての地方とその普遍化など、様々な角度から著述し、かつ、以後の各論の導入部としての役割を見事に果たしている。

第Ⅰ部では、地方と都をつなぐ猿楽のあり方について、能楽の代表的なジャンルである神能、夢幻能、物狂能を題材にして著述している。第一章「神能の位置―猿楽能の寿祝性と在地共同体」、第二章「夢幻能の変成―栄光を語る亡霊の出現」、第三章「時代を映し出す物狂能―異性・子売り・母性」、第四章「虚構の「中世神話」の形成―能楽・神道集・縁起を中心に」の四章から成る。

第Ⅱ部は、女性史の視点で捉えた猿楽論で、女装束とその変遷に着目した第五章「着衣する身体―能楽における女装束」、および様々な身分の女性の、様々な状況設定による女の語りを論じた第六章「能楽における女の語り」から成る。

第Ⅲ部では、第七章「中世芸能座の構造と差別」にて、声聞師を出自にもつ猿楽が、座の組織に改編を加えることで声聞師の枠を超えて脱賤化を果たす過程を論じ、第八章「中世猿楽座の組織構成―結崎座・円満井座の座規約を中心に」にて、副題にある両座の規約を他の商工業等の座と比較し、さらに両座間において比較検討している。猿楽の出自が声聞師にあるか否かについては議論があるところだが、商工業を含め様々な座を研究してきた著者ならではの論考といえる。

本書は、中世経済史の立場から猿楽を論じるのみならず、現代の能楽の愛好者として、そして、やはり猿楽を愛してやまなかった中世の貴賤都鄙老若男女の視点で猿楽を論じる好著である。分析の対象は、在地の文書や記録を多用しつつ、作品の内容や演出、装束や能面にまで及び、実に多彩であり、本書は歴史と文学双方の性格を合わせ持っているといえる。なお、タイトルに「猿楽」ではなく「能楽」を用いたのは、猿楽は過去の芸能ではなく、現代まで続く生きた芸能であるという思いからだろう。

中世を専攻する者は折に触れて猿楽を意識するであろうが、猿楽の重要性を改めて認識する機会を本書は与えてくれるだろう。そして同時に、能楽堂に足を運び、生の舞台を見るきっかけをも与えてくれるのではないだろうか。

(池田美千子)